

今週の為替相場見通し(2025年6月16日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		142.80 ~ 145.47	144.10	143.80 ~ 147.50
ユーロ	(ドル)		1.1373 ~ 1.1632	1.1550	1.1200 ~ 1.1700
(1ユーロ=)	(円)		164.57 ~ 166.68	166.22	164.00 ~ 169.00
英ポンド	(ドル)		1.3458 ~ 1.3632	1.3574	1.3200 ~ 1.3700
(1英ポンド=)	(円)	*	193.77 ~ 196.45	195.58	192.00 ~ 198.00
豪ドル	(ドル)		0.6457 ~ 0.6546	0.6489	0.6430 ~ 0.6550
(1豪ドル=)	(円)	*	92.32 ~ 94.75	93.50	92.00 ~ 94.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 范 哲遠

(1)今週の予想レンジ: 143.80 ~ 147.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

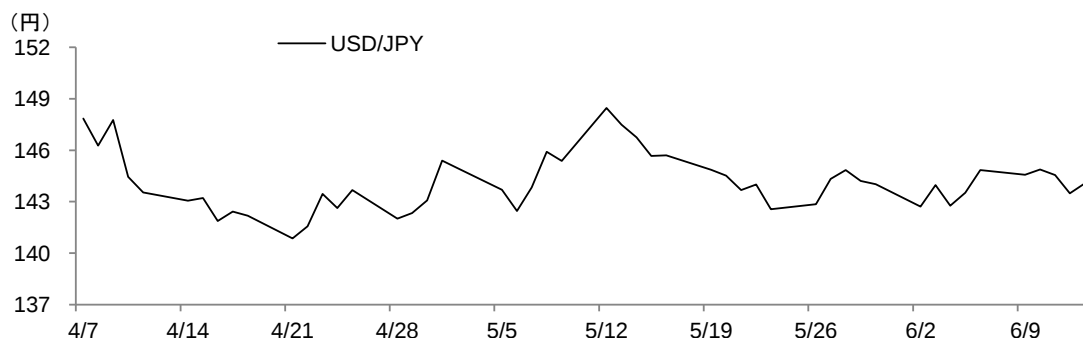
先週のドル/円は、週後半にかけて下落する展開。週初9日、144.69円でオープンしたドル/円は仲値にかけて145円手前まで小幅高も、直ぐに反落し144円台前半へ。その後は米金利の動向に振られながらの上下動。一時144円割れまで下押しするも、その後は144円台半ばへ反発し方向感のない値動きとなった。10日、植田日銀総裁のハト派な発言を受けて円売りが加速すると、145円台前半まで上伸後、米金利低下に合わせ144円台半ばへ軟化。その後は米金利上昇と共に145円付近へ再度上昇した。11日、米中通商交渉の進展を受けて145円台前半へじり高。米金利上昇に連れる格好で週高値の145.47円まで上伸した直後、米5月消費者物価指数の弱い結果を受けた米金利の急低下と共に一時144円台前半へ急落。12日、トランプ関税を巡る不透明感や中東情勢への懸念が意識されリスク回避ムードが強まった。米5月生産者物価指数の予想を下回る結果を受け、米金利低下と共に一時143.19円まで下値を切り下げた。13日、イスラエルによるイラン空爆との報道から、リスク回避ムードが一気に高まると、ドル/円は週安値となると142.80円まで下落。ただし、その後原油価格が急伸し、戦争拡大への懸念からドルが強含み、144円台を回復し越えた。

今週のドル/円はドル高・円安を予想。16(月)~17日(火)日銀金融政策決定会合、17(火)~18日(水)FOMCと日米の金融政策決定イベントが続く。まず、日銀については金利据置きがメインシナリオ。今回の会合では国債の買入について議論がなされる予定。四半期ごとに買入額を4000億円ずつ減らしてきたが、2000億円程度に減額する案が市場予想。先週10日(火)植田日銀総裁は基調的な物価上昇率は物価目標の2%まで少し距離があるとの認識を示しており、会合後の植田日銀総裁による会見でスタンスに変更があるか注目したい。トランプ関税の影響が現段階では不明瞭であり、ハト派な会合にならざるを得ないだろう。一方、FOMCも金利据置きが見込まれている。FOMCメンバーによる経済見通し(SEP)では前回の3月公表分において年内2回の利下げが中央値であったが、見通しに変更があるか注目される。直近の物価関連指標は減速が確認されたものの、トランプ関税によるインフレ圧力が数字として表れるのはまだ先であり、現時点での判断は時期尚早だろう。注目の経済指標は16日(月)米6月ニューヨーク連銀製造業景気指数、17日(火)米5月小売売上高、20日(金)日5月全国CPIとなっている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(6/9~6/13)の値動き:

安値 142.80 円 高値 145.47 円 終値 144.10 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 1.1200 ~ 1.1700 164.00 ~ 169.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に急上昇し、年初来高値を更新。週初9日、ユーロ/ドルは1.1410近辺でオープン。米5月雇用統計に過剰反応していたドルの反落、米中通商協議進展への期待感によるドル買いなどを背景に1.14台前半を中心に揉み合いが続いた。10日、植田日銀総裁のハト派発言を受けた円売りドル買いを背景に1.1400を割り込み、欧州時間には週安値となる1.1373まで下押す場面もあったが、その後は米金利低下を支えに小反発。11日、東京時間は米中通商合意によるドル高が重しとなるも、海外時間には米5月CPIの軟調な結果を受けて1.15手前まで上昇。12日、米金利低下を受けたドル売りの流れに上げ幅を拡大し、1.16台へ。米5月PPIや米新規失業保険申請件数の軟調な結果を受けて1.1632まで続伸し、2021年10月以来の水準をつけた。13日、イスラエルによるイラン空爆の報道を受けてリスクオフの展開となりドル全面高。ユーロ/ドル相場を押し下げ、欧州時間には一時1.1500を割り込む展開となった。売り一巡後は反発し、結局1.1550で越週した。

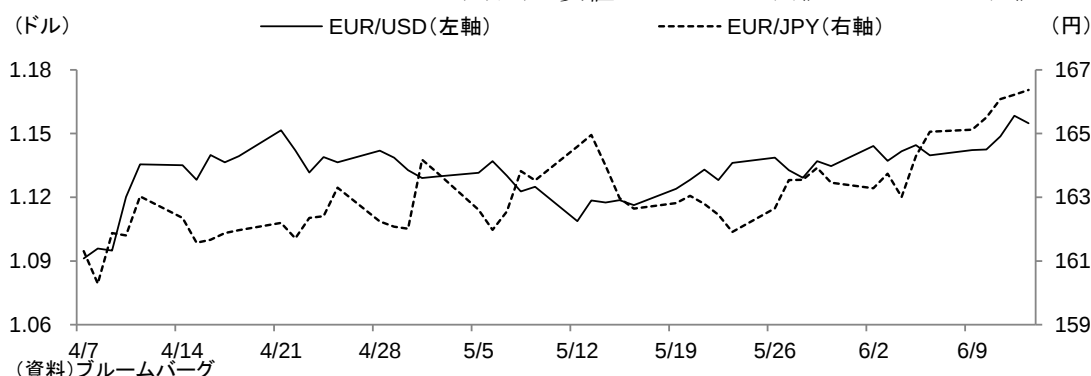
今週のユーロ/ドル相場は上値の重い展開を予想。ユーロ固有の材料は乏しく、ドルの動きに振られる展開となろう。先週末以降、イスラエルとイランによる攻撃の応酬が激化していることから当面はリスクオフ相場が想定され、有事のドル買いがユーロ/ドルの重しとなりやすいか。通商問題に目を移すと、米中合意後、トランプ米大統領は各国との交渉において「2週間以内に一方的に関税率を設定する」などと強硬姿勢を強めているが、米欧通商交渉は未だ難航している。6月15日(日)～17日(火)にカナダで開催されるG7サミットにおいては参加国首脳とトランプ氏による直接会談が注目点となる。EUサイドからは、当初交渉期限となる7月9日(水)までの大筋合意を想定し、期限以降に詰めの交渉を想定しているとの関係者報道が聞かれたことを踏まえれば、米欧交渉の進展には他国対比で時間を要するのではないかと見られる。各国の交渉進展が伝わればドル買い優勢となるだろう。また、17日(火)～18日(水)に開催されるFOMCでは4会合連続の政策金利据え置きが大方の予想となっているため、注目は同時に公表されるドットチャートやスタッフ経済見通しとなる。ページブックにて景気認識が下方修正されていることから経済見通しも下方修正される可能性が高いが、トランプ関税によるインフレ再燃が警戒され、3月時点の年内2回利下げ見通しが1回に修正される場合にはドル高圧力となる可能性があるため、こちらにも注意しておくべきである。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/9～6/13)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1373 高値 1.1632 終値 1.1550

(対円) 安値 164.57 高値 166.68 終値 166.22



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3200 ~ 1.3700 192.00 ~ 198.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は堅調推移継続も方向感なし。週初9日1.35台で始まる。10日朝方に英4月までの雇用統計がやや弱めの結果に一時1.34台へ下落。11日は米5月CPIが予想を下回りドル売りで1.35台半ばまで反発。12日は英4月GDPが予想以上の減速となり1.35台前半へ下落も、米関税への警戒感で再度ドルが弱含むと1.36レベルまで上昇。しかし、イスラエルがイランへ攻撃を開始する中、週末13日はリスクオフムードの中で1.35台へ下落した。英ポンドは対円で横ばい。9日に195円台後半で始まると、ロンドンでの米中対話を前にドル売りが巻き戻されドル/円が上昇すると196円台に。10日の英ポンド売りに連れて194円台へ一時下落するも程なく買い戻される。もみ合った後、13日にかけて英ポンドが下落したのに連れて一時194円を割り込んだが、ドル/円の上昇で再度195円台を回復した。

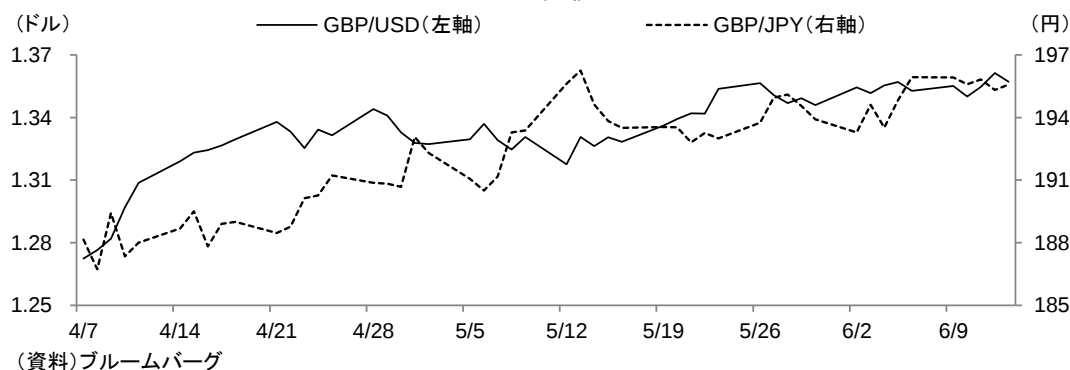
今週の英ポンド相場は、堅調推移継続を見込む。英側の注目は19日(木)に予定される英中銀金融政策委員会の政策発表。本稿執筆時点でのスワップ市場の織り込む利下げ確率はほぼゼロとなっており今回については政策変更はなさそう。一方で今年の英利下げをあと2回と見込んでいるスワップ市場に、政策委員の票割れがどう影響してくるかの方に注目が集まる。他にも18日(水)に英5月CPIと20日(金)に英4月小売売上が発表となる。一方で、先週11日の英政府の歳出プランは今のところ市場への影響はなかった。しかし、既に同プランの持続性に懐疑的な意見が多く、その多くが秋季予算での増税を示唆している。(タイミング悪く、同プラン発表翌日の英4月単月のGDPが予想を上回る減速となったこともありインタビューを受けたリース英財相は、増税の可能性否定しなかった。)例年通りであれば秋季予算は10月後半あたりにリリースされると見られる。英中銀は直接的に財政の状況を考慮はしないが、今後景況感などのセンチメントが悪化してくる場合には英中銀の行動に影響を及ぼす可能性もあり、中期的には注視が必要な事項となる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/9~6/13)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3458 高値 1.3632 終値 1.3574

(対円) 安値 193.77 高値 196.45 終値 195.58



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 0.6430 ~ 0.6550 92.00 ~ 94.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは年初来高値を更新する場面もあったが、週後半は地政学リスクムードの強まりから反落した。週初0.65手前でオープンした豪ドルは前週の米5月雇用統計後のドル買いが巻き戻される展開に0.65台前半まで上昇。その後は米中通商協議への期待感を背景としたドル買いに豪ドルが反落する場面もあったが、米金利低下に豪ドルは値を戻した。10日はドル買い地合いに0.6500を割れる場面もあったが、米中通商協議への期待感を受けた米国株の上昇に豪ドルもサポートされ0.65台前半まで反発した。11日の早朝には中国代表団から米中貿易協議にて大枠のコンセンサスに至った旨の発言があったものの、具体的な内容が示されなかった為か反応は鈍かった。その後は0.65ちょうどを挟んだ推移が続いた後、NY時間に発表された米5月CPIが市場予想を下回ったことを受け豪ドルは年初来高値となる0.6546まで急伸。その後は地政学リスクや軟調な米株価が重しとなり0.65ちょうど付近まで値を戻した。12日、前日の流れを受け豪ドルは0.64台後半まで下落したものの、米5月PPIや米新規失業保険申請件数の結果を受け米金利低下、ドル売り地合いの中、豪ドルは0.65台前半に反発した。13日、朝方にイスラエルによるイラン空爆との報道にリスクオフ一色の相場となる中、豪ドルは週安値の0.6457まで急落。その後値を戻す場面はあったが、イランの報復報道を受け有事のドル買いに上値を押さえられ、結局0.6489で越週した。

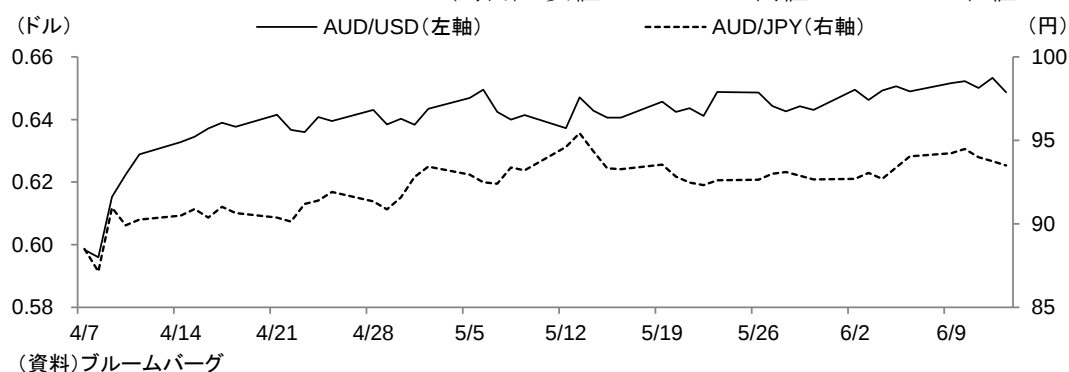
今週の豪ドル相場はレンジ推移を予想。FOMCをはじめ各国の中銀会合が開催され、イベントに振られる相場だろうが、豪ドルに関しては地政学リスクが重しとなり、積極的に高値を追う地合いとはならないだろう。米中通商協議は先週にて一旦終了しており、更なるリスクオンを誘発する材料とはなりにくいことも上値を抑える要因となる。一方で、直近の米経済指標の結果を受け市場は年2回の利下げをフルで織り込んでいる中、開催されるFOMCでハト派発信がなされる場合やトランプ米大統領による関税政策を巡って進展が見られない場合にはドル売りが強まり豪ドルのサポート要因となるだろう。加えて週初日足の一目均衡表を見ても基準線レベル(0.6452)や200日移動平均レベル(0.6428)もサポート材料となり得る。16日(月)は中国5月小売売上高、中国5月鉱工業生産、19日(木)は豪5月雇用統計の公表が予定されている。豪1~3月期GDPを見ても景気の悪化が意識されており、足許継続している雇用の堅調さが確認された場合においてもRBAの利下げパスに与える影響は限定的だろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/9~6/13)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6457 高値 0.6546 終値 0.6489

(対円) 安値 92.32 高値 94.75 終値 93.50



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。